

Letters

Arpak

レターズアルパック

VOL.202

ISSN 2432-5295

特集
「願い」

C O N T E N T S

◆特集：【願い】・・・01

・復興への願いを込めて「強さとしなやかさ」を備えた地域づくりを目指して・・・02

・まちの歴史や文化を次世代に引き継ぐことが地域の願いです。・・・03

・平成の氏子駈・氏子狩復活事業・・・04

◆今、こんな仕事しています・・・05～08

◆地域に寄り添って地方創生を考える・・・08

◆近況＆イベントのお知らせ・・・09～10

◆まちかど

・道の駅に託す地域の願い・・・裏表紙

(写真) 大阪城公園の梅林／撮影：鮎子田稔理



特集 「願い」

「願い」は叶えるためにあります。
叶えようとする「思い」といっても良いかもしれません。
叶えない願いは「妄想」と言います。
叶えようとする主体性があるのはじめて「願い」になるわけです。

「願い」は強く思うこと。
9.11 テロの後 "I Love New York" の気持ちが高まった人がたくさんいました。
その時にある人が教えてくれました。
より思いが強い表現は "I Heart New York" なのだと。
なるほど "I ♥ NY" は "I Heart New York" とも読めますね。

まちづくりはまちを強く思うことから始まります。
"I Heart My Town"
わがまちへの主体的で強い思い。
まちづくりは「願い」からはじまるのです。

編集委員会



復興への願いを込めて

「強さとしなやかさ」を備えた

地域づくりを目指して

中塚一
副社長兼大阪事務所長

平成23年9月の台風12号の大雨による紀伊半島大水害、平成28年4月の最大震度7が2回発生した熊本地震。度重なる大災害による被災者及び関係者の方々の深い悲しみは癒やすことはできません。地元の人々の復興に向けた様々な願いを込めた、地域づくりをお手伝いしています。

■1億立方メートルの土石流が発生した紀伊半島大水害からの復興

「深層崩壊」という言葉が連日メディアで報道された紀伊半島大水害。国内の観測記録最大という大雨により大規模な斜面崩壊が多数発生し、崩壊土砂が河川をせき止める「河道閉塞」が生じました。その結果多くの道路や橋梁が閉鎖さ

れ、山間部に多数の孤立集落が発生し、新たな集落づくりが求められました。

住宅や暮らしに関する復旧復興については、木造を含む応急仮設住宅の建設、安全な集落での風景に配慮した木造復興公営住宅の建設、小規模住宅地区改良事業やみんなで話し合い活動するソーシャルなソフト施策を活用した集落再生等が、地域の方々と様々な専門家、行政職員、設計者、大学、NPO、コンサルタント等の協力・連携のもと実施されました。

特に、十津川村における地域の資源である森林の活用や役場内の部局間の壁を越えた委員会の開催と事業の実施。同村の谷瀬集落における自主自立の精神に基づくやりがい・生きがいが得られる新たな集落づくりへの協働活動や修復型のハード整備等は、山間部の豊かな暮らしを継承・発展していく



谷瀬地区の風景に馴染む木造の復興公営住宅

今後のモデルになる取組として、我々の事務所メンバーも多くの学びがありました。

■連鎖して2つの断層が動いた熊本地震からの復興

熊本地震は2つの「断層」による連鎖型地震であり、既成市街地

から中山間部の集落まで、最多避難者約184千人という甚大な被害を及ぼしました。人的被害、住宅被害、社会基盤施設（道路や橋梁等）被害、土砂災害に加え、田畑等の農業基盤への被害や宅地や擁壁等への被害をどのように復旧していくのかが大きな課題となっています。

現在、震災から約11ヶ月が経過し、各地で地域住民による勉強会や協議会が立ち上がってきた段階です。復旧復興をお手伝いしている東部の中山間の集落では、今後、住まいの復興から集落の復興、地域産業の復興へと総合的な暮らしの復興を支援したいと考えております。



南阿蘇村黒川地区

まちの歴史や文化を次世代に 引き継ぐことが地域の願いです。

嶋崎雅嘉
地域再生デザイングループ



先日、柑橘栽培や漁業が活発なまちとして有名な愛媛県八幡浜市を訪れました。まちを歩くと交易拠点として発展した明治期の雰囲気を感じさせる町家が点在していますが、空き家となり老朽化にまかされている建物が多く見られます。

まちで出会った伝統工芸士の若松さんのお話を聞くと、時の経過とともに古い建物はどんどんなくなってしまう、まちの歴史にとって重要な建物でも朽ち果てていくことを心配されていました。

若松さんご自身の住居兼仕事場である建物も古い建築物であり、大切に使われているのですが、土壁が下がってきたり、壁の外側をトタン板で養生せざるを得ない状況です。この修繕には、莫大な費用がかかるため修繕ができない現状を悩んでおられました。



■価値観の共有と修繕費を生み出す仕組みが必要

ニースレター184号などでも紹介している「檜原町家灯籠会」でも古い町家がどんどんつぶされ町並みが変化してきている中、同じような課題認識をもって活動に取り組んでいます。

昨年、行われた「のきさき市」では、町家の軒先を借りたお店が出されました。出店にあたっては出店料を設定し、軒先をお借りした町家居住者の方に場所代を支払う仕組みが導入されました。これは将来的に、空き家となっている町家などを活用して、賃料などの資金を得ながら、修繕や維持管理にお金を回す仕組みを目指した第一歩として取り組まれたものです。

「のきさき市」の開催により往時のにぎわい風景が復活し、町家が立ち並ぶまちの原風景の良さを、多くのまちの人たちが再確認したと思います。そのことにより、自らが住むまちに対する誇りを高めてもらふこと、そして、この町並みや建物を残すことの大切さや価値を理解してもらふことを目的の一つとして取り組まれています。

■建物だけが保存されるのではなく、まちの中でどのように引き継ぐかを考える

一方、京都市都心部などではインバウンドなどの効果もあり一棟貨しの簡易宿所として町家や長屋の活用が進んでいます。宿屋の運営により改修資金が生み出され、京町家の保全は進んでいると捉えることができますが、キーボックスやネット予約だけで運営される宿屋は、まちに対して閉鎖的でまちの中でその存在が浮いてしまい、場合によっては地域の住環境を脅かす存在にもなりかねません。地域の文化や歴史を引き継ぎたいという願いを叶えるためには、建物単体が残るだけではなく、地域に開き、地域の暮らしやコミュニティに貢献できる場としての活用が望まれます。



町家などの歴史的な建築物は、そのまちの歴史や文化の積み重ねの中でその場所に存在しています。古い建物や町並みを次世代に引き継ぐうえで、将来のまちに何を引き継ぐのか、その中で古い建物がどのような存在となりえるのかをイメージして、活用の手法を考えることが大切です。

■八幡浜で描く夢

若松さんのお話によると、八幡浜市では5月初旬～中旬になると、みかんの花が一斉に咲き、街なかのみかんの花の甘い香りです。いつか、古い町家を活かした宿屋に泊り、地域の方のお話を聞きながらみかんの花の香りに充たされた、のんびりとした時間を過ごしたいと願っています。

地細工紺屋 若松旗店

http://iyokanet.jp/corporate/spot/detail/place_id/3544/

平成の氏子駈・氏子狩復活事業

いにしえ
～古からの人の繋がりを活かした地域づくり～

三木健治

地域再生デザイングループ

とち・ぶな・けやきなどから轆轤ろくろと呼ばれる工具で、椀や盆などの木地をつくる職人のことを木地師きじしと言います（轆轤師や木地屋とも呼ばれます）。

木地師の多くは、諸国の深山に入り作業をし、良材が無くなると、新しい山へ移住する暮らしを送っていました。



お椀の製作工程

2013年にスタジオジブリが製作した「かぐや姫の物語」に、木地師が登場しますが、そこでも木地師が移住生活者であったことが描かれています。

■「木地師のふるさと」永源寺

全国各地に移住しながら活動する木地師を、保護・統括する支配所が、滋賀県東近江市の永源寺地区にありました。



大皇器地祖神社（君ヶ畑町）

滋賀県と三重県の県境の山間部にある、小椋谷と呼ばれる蛭谷町ひるたにに「筒井公文所」、君ヶ畑町きみがはたに「高松御所」という2カ所の支配所があり、支配所の役人が、全国各地の木地師を訪ね歩く「氏子かり」を行っていました。

支配所の役人が、全国各地の木地師を訪ね歩き、氏子料や初穂料を徴収し、その代わりに神札や鑑札（営業許可書）などを渡して身分を保証していました。

この「氏子かり」における金銭授受の記録が「氏子駈帳」と「氏子狩帳」と呼ばれ、江戸期から明治期のものが、現在も永源寺地区に残されています。

「氏子駈帳」と「氏子狩帳」には、移動生活を送る木地師の身元を改める人別帳の類も含まれ、全国の木地師は、古くから永源寺地区を中心に



筒井神社（蛭谷町）

ネットワークされていたのです。

■惟嵩親王伝説

なぜ、山深い永源寺地区が、全国の木地師とつながっていたのか、一つの伝説が語り継がれています。

平安時代初期に、文徳天皇の第一皇子であった小野宮惟嵩親王これたかしんのうが、永源寺地区に隠棲し、轆轤を発明し、周辺の仙人に、その技術を伝授し、全国各地に伝わったという伝説です。

惟嵩親王を祀る神社として、蛭谷町には「筒井神社」、君ヶ畑町には「大皇器地祖神社」があり、それぞれが筒井公文所、高松御所と呼ばれる支配所の一翼を担っていました。

毎年蛭谷地区で開催される「惟嵩親王祭」には、全国各地の木地師が集まるなど、現在も、永源寺地区は、全国の木地師にとって大

切な聖地となっています。

■平成の氏子駈・氏子狩復活事業

現在、東近江市では「森の仕事創出」に取り組んでおり、その一つとして「平成の氏子駈・氏子狩復活事業」を行っています。

全国各地で活躍する木地師の方（や、そのゆかりの地域）を訪ね歩き、永源寺地区との関係性や、地区への願いについて伺っています。

また、木地師ゆかりの姓と言われる全国の「小椋」「大蔵」姓の方々に、自身の祖先の事や地区への願いなどについてアンケートを行っています。

このように地域にルーツを持つ全国の方々と繋がりがながら、地域を見直していくことは、人口減少時代における地域づくりの一つのモデルではないかと考えられます。※本業務は、地域産業イノベーショングループの高田剛司、山部健介、公共マネジメントグループの石井敏史、渡邊美穂も担当しています。



地元木地師の作業の様子

富田林の「えびいも」ファンを増やしたい！ Let's Everybody (エビバディ)！エビイモ！

片山麻衣：

地域産業イノベーショングループ

みなさんは、「えびいも（海老芋）」を知っていますか。食べたいことはありませんか。

「えびいも（海老芋）」は、サトイモの品種の一つで、粘り気に富み、よく締まった肉質、優れた風味とほのかな甘みが特徴です。反り返った形状と表面の横縞がエビに似ていることが名前の由来とされています。

大阪府富田林市の特産品であるえびいもは、その品質の高さから京都をはじめ高級料亭の人気がなっていますが、市民にはあまり知られていないのが現状です。

2月に、市民や事業者の方に富田林のえびいもの魅力を知ってもらい、使ってもらうため、「えびいも大試食会」富田林が誇るえびいもをみんなで食べよう！」を開催しました。

市内の飲食店、和洋菓子店等に協力いただき、えびいもコロッケ、えびいものすいとん汁、えびいもの焼き芋カナッペなど、全10品試食いただきました。

参加者

からは「えびいもを初めて食べたが、味にくせ



えびいも料理「えびいもの黒ごま風味すいーと」と



えびいも大試食会のチラシ

なお、この業務は富田林市から受託し、地域産業イノベーショングループの原田弘之、武藤健司、公共マネジメントグループの渡邊美穂が担当しています。



えびいも大試食会の様子

がなく、色々な料理に使えることが分かった」、「えびいもを使った料理をもっと知りたい」などのお声や「家庭料理で試したい」と喜んでいただきました。私も初めて「えびいも」料理を食べましたが、食感はねっとりでしたが、味はあっさり！スイーツにもよく合っていて、とても美味しかったです。

今後は富田林のえびいもを市内外の飲食店、市民の方に使ってもらうために、流通の仕組みや加工品開発等を検討しています。

子ども建物たんけん隊 ～建物の魅力の気付きと発信～

増見康平：

建築プランニング・デザイングループ

生きた建築ミュージアム大阪フェスティバル（イケフェス）には、子ども向けのプログラムもあります。

現在、大阪市の生きた建築ミュージアム事業の展開方策として、イケフェスの展開や組織体制のあり方、また、建物やまちへの興味関心を向上させる方策などを検討しています。

この検討の一環で先般、大阪市内の小学校において、子ども向け建築プログラムの社会実験、「子ども建物たんけん隊」を行いました。

子どもたちは、校区内をまち歩きし、興味を惹かれた建物を見つけ、その建物の魅力について発表しました。大人の目線では、特徴的な建物が少ない地域でしたが、建物の要素や素材の見た目の面白さ、自分の家とは



ミッションの説明を聞く子どもたち



校区内のまち歩き

違ふところ、さらに高さ制限により上階へ行くほどセットバックしている建物について「どうしてあんな階段のような形をしているのだろう」などと、好奇心豊かな発表が多くありました。「校区を歩き、興味のある建物を探して来なさい」とのミッションに対して、風景の中の「地」としてしか見てなかった建物を「図」としての認識に即座に切り替える子どもの順応性にただただ驚かされました。社会実験への参加を通じて、子どもたちは普段何気なく見ていた建物やまちへの興味・関心を持つようになったと思います。子どもたちが大人になっていく過程で、建物やまちへの興味関心がさらに強まり、建物の専門分野に進む人が少しでも増えてくれたらと思います。

子どもたちはスマホといかに向き合うのか

坂井信行：

都市・地域プランニンググループ

いこまスマホサミット 2016 の運営をサポートしました

いまや子どもたちの生活にも深く入り込んでいる携帯電話やスマートフォン。便利ですが、使い方一つで生活習慣の乱れや学力低下、さらにネットいじめや犯罪に巻き込まれる恐れもある諸刃の剣でもあります。

こうした問題に対応していくため、生駒市の主催により「いこまスマホサミット2016」が開催され、私たちが運営のサポートをさせていただきまし

た。各地の学校や自治体などで、インターネットに関わる情報モラルの重要性を日々、訴え続けておられるソーシャルメディア研究会の石川千明さんが全体の進行を、私たちは子どもたちの議論をサポートするファシリテーションを行いました。

当日は、市内の小学生、中学生を中心に31名の子どもたちが参加しました。まずはグループに分かれてスマホの長所と短所を書き出しました。次に時間、人間関係、危険の3つのテーマごとに携帯電話やスマホを使う上でのルールを考えました。グループごとに提案されたルールの中から、みんなで投票して「いこまスマホ宣言2016」として3つのルールを取りまとめました。

スマホサミットは、子どもた



スマホの長所と短所を書き出す子どもたち

【いこまスマホ宣言 2016】

- ①時間： 考えよう自分の居る場所やるべきこと
- ②人間関係： スマホがないと仲間じゃないそれは本当の友達？
- ③危険： 見たくても一歩止まって考えよう

ち自身にルールを考えてもらうところがポイントです。みんなで作ったスマホ宣言を、学校でどうやって広めていくかも考えました。自分たちに身近な問題の解決策を、避けることなく自分たち自身で考えていくアプローチは、まちづくりと共通するものがあると思いました。

「ワガヤネヤガワ・ベンチャービジネスコンテスト」 グランプリ発表会が開催されました

江藤慎介：

地域産業イノベーショングループ

平成29年1月21日に寝屋川市アルカスホールにて、「ワガヤネヤガワ・ベンチャービジネスコンテスト」グランプリ発表会が開催されました。

「ワガヤネヤガワ・ベンチャービジネスコンテスト」は、「工業（ものづくり）」「商業」「農業」「協働」「中高生」の5部門に対する学生のビジネスプランを募集するもので、学生たちの斬新で優秀なビジネスプランの実現化及び人材育成、市内産業のさらなる振興を目指しています。

3年目となる今年度は、2次審査を通過した部門賞・特別賞の5つのグループが、グランプリを目指して発表を行いました。

発表会の10日前には「プレゼン研修会」と題し、発表する学生の皆さんにワークシヨップ型でプレゼンのテクニックをお伝えする機会をいただきました。その後、学生たちは徹夜などもしながらブラッシュアップに努めたそうです。

努力の甲斐あって、本番の発表は、研修会やリハーサル以上に堂々とした内容になっていました。

当日は、昨年度受賞者による、受賞後の活動の中間発表も行わ

れました。市内外の企業や大学等と連携しながら、プランの事業化に向けて試作や試験販売を行い、また技術課題の検証に取り組むなど、販売まであと少しのところまでブラッシュアップが進んでいました。

仕事とは何か、稼ぐとは何かということになかなか触れる機会のない学生の皆さんにとって、ビジネスプランコンテストが、まずは考え、実現に向けて実際に手や足を動かしてみる機会になっ



いばきたを 10 倍楽しむ方法

高田剛司：

地域産業イノベーショングループ

追手門学院大学、大阪大学、立命館大学の3大学6チームにより、大学生の視点から「いばきた」の魅力と今後の地域づくりについて提案してもらいました。

「いばきた」（大阪府茨木市の北部地域）は、市街地から車で30分程度の距離にもかかわらず、都会の喧噪を離れ、自然が豊かでゆったりとした時間の流れる地域です。しかし、ここも若い世代の流出や高齢化、人口の減少、農業の担い手不足、山林の荒廃など、全国の中山間地域と同じ課題を抱えています。

ところで、茨木市内には多くの大学が立地し、学生が学んでいます。2月の土曜日、学生6チームが集結し、各グループがフィールドワークした結果をもとに、今後の地域づくりの手法についてプレゼンし、地元の人たちと意見交換を行う報告会を開催しました。提案の中で印象的だったのは、写真をメインにしたSNSである「インスタグラム」が学生の行動において圧倒的民権を得ていること。地域の魅力を発信するツールとして活用する提案が複数のチームから挙がっていました。その他、点在する施設やお店をつなぐ仕掛けづくりにイベント的要素を取り入れること、定住者だけで

は難しい今後の地域づくりの担い手に外部の人による「準村人会」を作ることなど、住民と学生の間で活発な意見交換が行われました。

出席した地元の人のアンケートでは、「地元の方でも知らないところを調査してくれて、一度訪問してみようと思った」、「イベントプランを参考にしたい」、「SNSの威力を再認識した」といった意見が寄せられ、地元の人たちも、また学生さんたちもお互いに刺激を受けた機会になったのではないかと思います。

課題は山積でも前を向いて「10倍楽しむ」という発想で、多くの人を巻き込んだ地域づくりを継続していくことが、未来へのヒントを見つける近道ではないかと感じた半日でした。



未来に繋ぐ「^{まち}鉾山町に生きる誇り」

西村創：

地域再生デザイングループ

生野鉾山及び鉾山町の文化的景観整備計画策定のお手伝いをしています。

兵庫県朝来市の生野地域は、平成26年3月に、「生野鉾山及び鉾山町の文化的景観は、鉾山開発及びそれに伴う都市発展によって形成された文化的景観であり、現役の鉾山都市として生産活動及び祭等の習俗を継続しつつ、鉾山都市に独特の土地利用の在り方を示している」として、国の重要文化的景観に選定されています。

文化的景観の維持には、時代の影響を受けつつも、生業の継続によって基本的な価値が受け継がれることが必要です。しかし生野の場合、生業である鉾山採掘が終了しているため、生業によって景観が維持される状況にはなく、生活様式が時代によって変化の中で、将来的に鉾山町の景観が地域住民の生活と遊離する可能性が危惧されています。

一方で、景観を維持するには



その地域での営みが継続される必要があります。生野地域の住民の多くは、「鉾山とともに育まれた町」の認識と培われた鉾山文化を受け継ぎながら生野に住み続ける意志を持っています。これは、長きにわたって地域で積み重ねてきたまちづくり事業でも強く示されており、「鉾山町に生きる誇り」を未来に繋ぐ意識を持たれています。

今回の生野鉾山及び鉾山町の文化的景観整備計画では、文化的景観を維持していくための方針や方法を具体化し、景観を構成する鉾山町や鉾山文化を象徴する要素を守るとともに、生野に住み続け、鉾山文化と誇り、地域での営みを次世代へ継承していくための具体的な行動を明らかにしています。2017年春に公表予定ですので、是非一度、一読いただき、実際に足を運んでいただければと思います。

※本業務は建築プランニング・デザイングループの高坂憲治もお手伝いしています。



杉原千畝氏の顕彰施設に思う

安藤謙：
名古屋事務所

杉原千畝氏は、皆さんご存知だ
と思いますが、「命のビザ」を
発給し、約6000人のユダヤ
人難民を救ったあの人です。

杉原千畝氏は岐阜県八百津町
に生まれ、人間形成の礎となる
青少年期の約10年を名古屋市中
区で過ごしました。

愛知県では、この杉原氏の功
績を顕彰する展示施設計画を検
討し、当事務所がそのお手伝い
しました。

杉原氏は、現在の名古屋市中
区平和一丁目に住居していま
した。当時の古渡小学校（現平
和小学校）の後、県立第五中学
校（現瑞陵高校）に学び、早稲
田大学へ進学、東京へ、世界へ
と活躍の場を広げていきます。

現在の平和小学校校内には、
卒業生である杉原千畝氏の生誕
百年を記念した「ちうねチャイ
ム」が設置されています。2本
の曲線を持つミニUMENT型の
チャイムは、毎朝8時15分に鳴
り、命の尊さ、思いやりの心、
平和、愛を表現しています。

第五中学校（現瑞陵高校）ま
での通学路4.5キロメートルは
「杉原千畝人道の道」として指
定され、昨年銘板が整備されま
した。

作家江戸川乱歩の出身校でも
第五中学校校内には、イスラ



杉原千畝記念館（岐阜県八百津町）

エルから寄贈された「オリブ
の木」があるほか、杉原氏の資
料も一部保管され、彼の学びの
精神を学習教育に取り込んでい
こうとしています。大正13年に
建てられた県内最古の講堂感喜
堂には、杉原・江戸川両氏のパ
ネル展示があります。

杉原氏生誕地の岐阜県には記
念館や公園があり、ユダヤ人難
民が上陸した福井県敦賀港では
「人道の港ムゼウム」として施
設型の展示を行っています。ま
た、岐阜県を中心に「世界遺産
へ」という声もあり、高山も含
めイスラエル観光客誘致も進め
ています。

愛知県・名古屋市は杉原氏の
学びや人材育成面からその功績
を顕彰・継承していこうとして
います。今後、市民・県民によ
る研究・継承活動へ拡大するこ
とを祈念します。

その20 地域に寄り添って地方創生を考える

国土主軸から離れ、自立して人口を増加やした東根市

※詳細は、弊社ホームページに掲載しています。（<http://www.arpak.co.jp/newsletter/202/12.html>）



森脇宏：
代表取締役社長

国土主軸から離れ、ベッドタウ
ンの性格を持たずに、企業誘致
を図って、人口を増やしている
東根市（山形県）について、そ
の要因を考察しました。

■企業誘致による人口増加

東根市の人口は、1970年
を底に、とりわけ1975年以
降、急速に増加し続けています。
また、この頃に工業団地整備と
企業立地が始まっていますの
で、これらが人口増加の要因だ
と考えられます。

さらに、通勤・通学流動をみ
ても、東根市への流入者数は、
東根市からの流出者数より多
く、産業の発展が人口増加を牽
引してきたと考えられます。

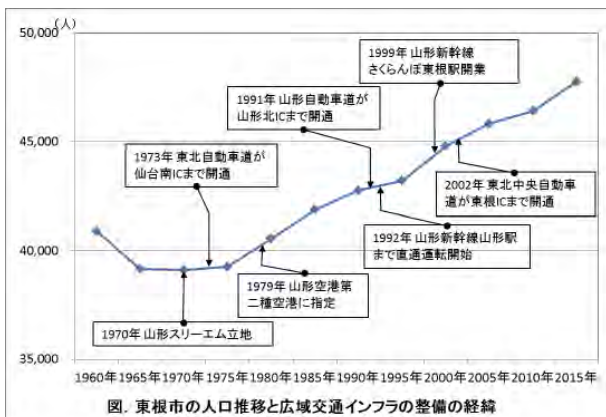
■高速道路の期待で企業立地

それでは、企業誘致の成功要
因は何でしょうか。市内の最大
事業所である山形スリーエムの
社長は、1970年に立地した
理由として、①用地面、②人材
面とともに、③将来的に交通網
が整備される期待を語っておら
れます。ただし、この頃の広域
交通インフラは、約60キロメー
トル離れた仙台市に到達した東
北自動車道だけです。いずれ近
くまで整備される期待でも立地
が進んだと理解できそうです。

■空港や新幹線による寄与

空港や新幹線による寄与もあ
りそうです。例えば山形空港の
第2種空港（国内幹線用空港）
への指定が1979年、山形新
幹線のさくらんぼ東根駅の開業
が1999年です。人口推移と
重ねてみると、空港や新幹線の
整備によって、東京との行き来
が容易になることが、企業立地
と人口増加の勢いを強めている
と読めるかも知れません。

このようにみると、国土主軸
から離れていても、広域交通イ
ンフラは、企業立地を介して、
人口増加に重要な役割を果たし
てきたと言えます。



資料：国勢調査（各年）

3月～4月実施の「地域づくりセミナー」

ー地域に寄り添う地方創生をめざしてーを開催しています

畑中直樹

大阪事務所副所長

先号でもご紹介しました地域づくりセミナーを今後も開催します。自治体関係者、研究者、事業者、NPO等地域づくりに取り組む皆様の幅広い参加をお待ちしております。詳しくはホームページをご覧ください。

第4回『地方創生に向けて企業が挑む新しい農業ビジネスモデル（仮）』

第5回『若者の夢と仕事と場所づくり（仮）』

（日程は、調整中）

はじめてのインド、はじめてのスリランカ

～南インド経済事情視察で感じたこと～

杉原五郎

代表取締役会長

昨年12月、中同協（中小企業家同友会全国協議会）主催の視察で、インドとスリランカを訪れました。

インド・デリーの印象は、第1に、まさにクルマが溢れていること。市内の道路も郊外とつながる高速道路も、至るところで大渋滞・大混雑を起こし、自動車による排気ガスで、空はどんより曇っていました。第2に、インドの経済は、自動車産業の発展に牽引されて好調に推移していること。デリーの郊外にあるニムラナ工業団地の自動車関連の日系企業2社を訪問して感じました。第3に、国民の所得が確実に上昇して、富裕層と中間層が生まれつつあること。デリー市内に最近できたショッピングモールは、家族連れや若いカップルで賑わっていました。

スリランカ・コロンボの印象は、第1に、静かで穏やかなこと。海が近くにあり、夕日がインド洋の水平線に落ちていく様が美しく、シンガポールとよく似た英国風の雰囲気を感じました。第2に、スリランカの

経済は、インドと同様、発展の途上にあること。コロンボ市内では、超高層の業務ビル・ホテル・マンションの建設ラッシュが始まっていました。第3に、スリランカの人々は、大変親日的で、日本に対してあこがれを持っていること。日本で研修を受けた中小企業の経営者は、いずれも5S（整理、整頓、清掃、清潔、しつけ）を中心とする日本的経営を学んでいました。

今回の視察を通じて、成長しつつあるインドとスリランカの経済事情と日本との係わりがよく実感できました（詳細は、アルパックのホームページをご覧ください）。



デリーの市場をリキシャで巡る



スリランカの縫製工場

読者からのお便り

ニュースレター200号「京都駅ビル20年」の記事についてご質問を頂きました。『克明に事業進行の月日が記されているが、アルパックはどのように業務管理をされていますか』

“STAP細胞”事件の時、「研究ノート」が問題になりました。確かに地味な作業ですが、各人の日々の業務記録は、私どもでも大事です。ちゃんと記録しておかないと組織も当人も困ったことになります。

創業期「打ち合わせ記録」があらゆる記録の役を担っていました。1984年（昭和59年）11月、富士通のワープロ・オアシス30が入って少し進歩しました。

1985年に定めた「業務管理基準」（業務規定・301-2、起案：糸乘貞喜、決定：5月13日）は、プロポーザルから報告書提出まで12段階での担当者の作成、総務部の保管を義務付け。「打ち合わせ記録」の様式を引き

継いだ「業務管理フェイスシート」も決めました。現在も業務件名・活動日時・協議相手・担当者名・協議事項の順で記入し、活用しています。OA化のおかげで、記録はデータ保管のみでコンパクトになりました。私は変換ソフトでオアシス時代の文書もExcelにしています。

「業務管理フェイスシート」は、一次資料です。これを元に、“京都駅ビル”、“保育園”など業務ごとにまとめて「年表」にすると時系列的に概観することができ、モノを書くときに便利です。「研究ノート」があれば学术论文が書けるのです。総務部は業務ごとに集約した「工事別台帳」を「出来高査定」の根拠にしています。

関西学研アーカイブの作業でプロに教わりましたが、これを「基本文献」とし、交信手紙やプレスブリーフィングなどを「付属資料・関係資料」としてまとめて袋⇒箱へ整理すれば、アルパック・アーカイブ構築も容易でしょう。ご質問の答えになったでしょうか。

三輪泰司：名誉会長

近況 & イベントのお知らせ

アルパック創立 50 周年記念事業を開催します

森脇宏
代表取締役社長

アルパックは本年、創立 50 周年を迎えました。創立 50 周年を記念し、様々な取り組みを進めています。

取り組みの基本方針として、①継承、②情報発信、③多様性、④挑戦、⑤協働という 5 点を挙げ、これらを実現するため、① 50 周年継承事業、②情報化推進事業、③チャレンジ支援制度、④人材育成・活用制度、⑤プラットホーム形成事業の 5 つのタスクフォースを設置し、集中的に取り組んでいます。

記念イベントとして、アルパックが 50 年前にオープンした 2 月 3 日に、OB・OG 会を開催しました。秋には記念フォーラムの開催を検討しています。また、久しぶりの社内旅行を企画し、創業時からご縁があり、多くの外湯の設計を担当した城崎温

泉に泊まる計画を立てています。

今後とも、一層真面目に楽しく仕事に取り組んでいきますので、引き続きご指導ご支援いただきますようお願いいたします。



創立 50 周年記念の OB・OG 会 (2017 年 2 月 3 日)

受け継がれる国栖の翁の舞

樋口彩子：建築プランニング・デザイングループ

奈良県吉野町で国栖小学校跡地活用についてのお手伝いしている関係から、県の無形文化財である国栖奏^{くずそう}を見に行きました。国栖奏は、毎年旧正月十四日に、吉野町南国栖の天武天皇を祭る浄見原神社で行われます。精進潔斎した翁筋^{くずそう}といわれる家筋の男性が、神官に導かれて舞殿に登場し、笛や鼓の音に乗せて歌舞を奉納します。

古事記や日本書紀には、応神天皇が吉野に来られた際、国栖の人びとが歌舞を披露してもてなしたという記述があり、国栖奏^{くずそう}の原型とされています。また壬申の乱では、国栖の人々が後の天武天皇である大海人皇



子にかくまい、お慰めするために一夜酒や腹赤魚^{うぐい}を供して歌舞を披露したといわれています。

今年はめずらしく雪景色となり、ひっそりと岩壁に佇む舞殿にしんと降る雪の中での狩衣姿。冷えきった空気にこだまする歌声や鈴の音に、古代の人々の営みに思いを馳せるとともに、参詣者による玉串奉奠^{たまぐしほうてん}が行われたり、村人や参詣者一人ひとりの名前が読み上げられるなど、伝統的でありながらも、地域の人々の手で受け継がれてきた素朴さや和気藹々とした空気感を感じました。



浄見原神社脇に広がる雪景色の天皇淵（吉野川）



多くの参詣者



おばあちゃん市山岡の日本一の水車



土岐市どんぶり会館外観

鮎子田稔理：
建築プランニング・デザイングループ

そんな道の駅の今後の可能性を
探るために、岐阜県の東濃地域を
中心に八つの道の駅を駆け足で
巡ってきました。

岐阜県は道の駅王国とも言われ、
同じエリア内でも道の駅が多数あ
り、それぞれが地域の魅力を精一
杯発信して、訪れた人に楽しんで
もらえるように頑張っています。

平成5年から登録が始まった道の
駅は、平成28年の第46回登録で
1107箇所となり、車での移動の
際の休憩や情報収集になくてはなら
ない存在となっています。

ま
ち
か
ど

道の駅に託す地域の願い

美濃焼の産地である土岐市どん
ぶり会館（土岐市）の外観はまさ
にどんぶりをイメージしたインパ
クトのある外観でした。中に入
ると美濃焼のアンテナショップと
して充実した展示販売コーナーを
持っています。全国の道の駅の特
産品を集めた産品交流コーナーも
あり、岐阜県で北海道のお土産に
出会えるという思いがけない楽し
みを味わうことができます。

では、ダム建設を契機
に、この地域の産業遺

産として整備された日本一の水
車が圧倒的迫力で来訪者を出迎
えます。

また、地域独自の「食」に出会え
るのも道の駅の楽しみの一つです。
道の駅賤母（中津川市）では、テ
レビなどで紹介されていた「すんき」
を見つけました。赤カブの葉を塩を
使わず乳酸菌発酵させた、すっぱい
お漬け物で木曽地方の健康や美肌の
秘訣とも言われています。

道の駅平成では、特産品しいた
けをビールのお供に合うすなっく
に変身させていました。

どの道の駅にも地域の人の思い
があふれていて、真冬の弾丸道の
駅巡りにほっこり灯をともしてく
れるようでした。



「レターズ アルパック」は、ホームページからご覧いただけます。



アルパック (株) 地域計画建築研究所

Architects Regional Planners & Associates・Kyoto
<http://www.arpak.co.jp> E-mail: info@arpak.co.jp

本社

京都事務所 〒600-8007 京都市下京区四條通り高倉西入立売西町82 TEL(075) 221-5132 FAX(075) 256-1764

大阪事務所 〒541-0042 大阪市中央区今橋3-1-7日本生命今橋ビル10F TEL(06) 6205-3600 FAX(06) 6205-3601

名古屋事務所 〒460-0003 名古屋市中区錦1-19-24名古屋第一ビル6F TEL(052) 202-1411 FAX(052) 220-3760

東京事務所 〒102-0074 東京都千代田区九段南3-5-11スクエア九段ビル1F TEL(03) 3288-0240 FAX(03) 3288-0221

九州事務所 〒810-0802 (株)よかネット:福岡市博多区中洲中島町3-8福岡パールビル8F TEL(092) 283-2121 FAX(092) 283-2128



この用紙は「びわ湖の森を元気にする」
Kikitoペーパーを使用しています。